

■ ■ 弁天様外（六話） ■ ■ = = = ⇒ 三州横山話より

■ 村に欠けていた弁天様 ■

字仲平にある弁天の祠は、やはり天明年間に建てたそうですが、最初の動機は、村に様々な神様の祠が一通り揃ったにも拘らず、弁天様だけがまだ欠けていたので、欲しくてたまらないで、豊川の三明寺から迎えて来て祀ったものだと言います。

■ 張切りの松 ■

この弁天様の祠のそばの路傍に、張切りの松と言うのがあって、この松に注連縄を張って、村へ悪疫の入らぬ予防をしたと言います。ここには、馬頭観音や、村中安全などの碑が立っていて、愛宕神の祠などもあって、横山の北の端になっていました。

■ ヒチリコウの樹（木犀） ■

字仲平にヒチリコウという大樹がありました。花の香りが、七里の遠くまで香ると言っていて、名があると言いました。夏、菜莉花の似た黄色い花を持って、花の盛りには、風の吹き廻しによって、約一里を隔てた長篠の小学校の辺りまで、その香が聞かれたと言います。樹の下に立つと、真に咽るようで、無数の虻や蜂が集まっていて、黄色い花のこぼれが、あたり一面に敷いたようになって、その上を歩くのは惜しいようだなどと言いました。明治三八、九年頃、その頃盛んに流行した養蚕に香りが害があると言って切り倒されてしまって、あとは芽も出なくなりました。

■ 楠の柱の家 ■

この七里香の樹のあった家を仲平と呼んでいて、隣の北平という家とともに、元禄年間に早川孫三郎という家から分かれたと言いますが、一人は田地を所望したため、北平というところに、前に広い畑を控えて屋敷を造り、一人は立派な家を望んだので、村一番の眺望のいい仲平に、全部楠の柱に檜の敷居で家を建て、分家したと言いますが、その建物が、一五、六年前まで残っていましたが、今は改築したのでありません。

■ ウマツクロイ場の松 ■

万燈山の麓に、村の馬繕場があって、そこに妙な形をした松が二株、道路を覆っていました。その松の下に馬喰が腰をかけていて、家々から引き出して行った馬の蹄を切ったものでした。明治三五、六年頃、この松が伐られたと同じ頃に、馬繕いもいなくなりました、

■ 馬捨場 ■

字長畑という所から、寒狭川に面した崖の上に、雑木林の中にありました。そこには、馬の白骨がたくさん転がっていて、村で馬が死ぬと、村中のものが出て、箆で覆った死骸を昇いで行って捨てました。夜になると皮剥ぎが来て、火を焚きながら皮を剥ぐと言いました。